

☒ 話すこと ☐ 書くこと☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☒ パフォーマンステストでの活用☒ 授業での活用
☐ 課外活動での活用☒ 家庭学習での活用実践の
ポイント

目的・場面・状況に応じて「話すこと(やりとり)(発表)」を自ら発信できる力の育成

実証概要

<校数> 9校(小学校:4校、中学校:5校) <人数> 1,292名(小学校:350名、中学校:942名)
<学年> 小学校:第6学年、中学校:第1、2、3学年 <アプリ等> World Classroom(株式会社Hello World)

<AI機能について> AI機能を搭載した音声認識練習機能・英会話練習機能・プレゼン練習機能を活用し、「話すこと」において児童・生徒が課題やテーマに沿って、英語でのやりとりや発表練習を行い、フィードバックすることができるものである。

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●AI英会話を活用し、会話の練習を積み重ねることで自信をつける

目的・場面・状況を設定し、AIを使うことを目的とせず、使うことによって課題を達成できるよう目標を設定することが重要。単にAI英会話で個別に練習するのではなく、必ず、ペアのやりとりを入れながら、自分の伝えたいことを修正し、伝えたい内容をグループで再確認するなどのメリハリをつけた指導を教員側が意図的に行うことを意識させることで、会話することへの不安感を取り除き、主体的に学ぶ児童、生徒の姿が見られた。

●プレゼン練習機能を活用し、自分が作成したプレゼンの改善など、自ら学ぶ手立て

アプリ内で自分のプレゼンについて活用し、自分で訂正する時間を設定することで自分自身で間違いに気づくきっかけを作ることができた。捻出された時間で、指導者－学習者間、学習者－学習者間で「なぜこの修正が入ったのか」について話し合うことでより質の高い「伝わる英語」を使った言語活動につなげることが可能となる。

現時点までの実施状況

2年生での取組事例

授業の夢を語るスピーチの表現力をさらによりよくするための活動

- 1) 原稿の入力
- 2) 原稿の添削
- 3) スピーチの練習
- 4) スピーチを動画にて提出
- 5) ふりかえり

実際にデジタル課題を活用して考えたスピーチの原稿を入力し、自分の方で添削を行った。その修正されたスピーチの練習をして動画を提出した。



実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化

AIアプリを用いた「話すこと」に関するCEFR-J相当判定について、事前・事後で同一課題で比較(A1.1以上の割合)

82.1%

実証前



90.5%

実証後

②児童生徒の関心・意欲の変化

『AIアプリの活用は英語学習の役に立つ』と感じている児童、生徒

肯定的回答

75.5%

実証前



81.1%

実証後

③教師の指導の変化

AIを活用した取組には、肯定的に受け止められ、実証前後とも大きな意識の差異はなかった。どのように授業に取り入れていくか、普段の授業とどう組み合わせしていくか引き続き検討が必要である。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●情報共有と授業参観から手立てを考える

市内実践校の公開授業を実施、授業参観後は参加者と有識者を交えて意見交換をしながら、生成AIをどのように授業に活用させていくか、実際の子どもの姿を見ながら確認し合う時間を設定した。また、有識者による研修を実施することで、これからの生成AIとの向き合い方、今後の英語教育について示唆を受けることが教師自身の授業に取り組めるきっかけを作った。また、市内プラットフォームに実践校の事例を共有できるよう仕組みを構築した。

協議会の様子



事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

生成AIの活用により、小中学校の外国語教育「話すこと(やりとり)(発表)」の児童、生徒の発話量や発話練習の機会が増えることで、より自信をもって取り組むことができる。だが、AIの使用自体を目的化しないよう、英語を使う「目的・場面・状況」設定を明確にした授業設計が不可欠となる。また、AIを授業内に取り入れて活用する単元構成や授業マネジメントには、教員のAIへの理解と活用力が求められ、運用に慣れるまでの時間も必要となる。本事業を通して、取り組み続けることでの児童、生徒の英語力向上の可能性を見出し、教員への意識改革につながるきっかけとなり、検証結果を踏まえ今後の英語教育の促進につなげたい。